

5) 虚血性腸炎の3例

村山 裕一・山寺 陽一 (村上病院 外科)
 清水 春夫
 味岡 洋一 (新潟大学第一病理)

最近経験した虚血性腸炎3例につき報告する。症例①54歳男、腹痛にて来院。外来でショック状態となり緊急手術を行なった。回腸150cmに虚血性変化を認め腸切除を行なった。症例②71歳女、腹壁癭痕ヘルニア嵌頓にて来院。外来で整復し入院となる。翌日腹痛の増強と血圧の低下を来し緊急手術を行なった。脾結腸曲を中心に血行障害を認め大腸切除を行なった。ヘルニア嵌頓とは直接関連はないものと思われた。症例③62歳男、胃全摘兼脾臓摘出術後20病日頃より食後の下腹部痛を訴え、58病日腸閉塞の診断にて手術。終末回腸に約5cmの狭窄を認め回盲部切除を行なった。更に7日後、状態の改善を認めなかったため再々手術を行なった。脾結腸曲から下行結腸にかけて著明な狭窄を認め横行結腸に colostomy を行なった。症例1は小腸の壊疽型、症例2は大腸の壊疽型、症例3は小腸と大腸の狭窄型であり脾臓による血小板増多が原因となり腸虚血が起こったことが強く示唆された。

6) メッケル憩室起因乳児絞扼性腸閉塞症の

1 治験例

村上 博史・小山 善基 (県立新潟田病院)
 武藤 経一・北條 俊也 (外科)
 姉崎 静記・坂下 晃

メッケル憩室は、外科医が、他の原因で開腹した時に偶然発見されることが多いが、時には憩室自体が原因となって、種々の合併症を起こしてくることがある。私達は、最近、乳児のメッケル憩室起因絞扼性腸閉塞症の1例を経験したので報告する。

症例は、生後5ヶ月の男児で、昭和62年11月27日夜、ミルクの嘔吐で発症。小児科を経て、11月29日夕方、当科に転科し、腸閉塞症の診断で緊急手術を施行した。回盲弁より40cm口側にメッケル憩室があり、憩室より索状物が腸間膜及び右側腹膜に及んでおり、これより回腸が60cmにわたって絞扼されていた。索状物を切断して、腸閉塞を解除し、憩室の切除を行った。血行が改善し、腸壊死は認められなかったため、腸切除は行わなかった。

2才以下の乳幼児腸閉塞症の80~90%は腸重積といわれるが、メッケル憩室起因腸閉塞症にも留意する必要がある。

7) 癒着性イレウス手術における術前イレウス管造影の有用性

川合 千尋・加藤 知邦 (日本歯科大学外科)
 植木 秀功・松木 久
 井上雄一郎・田中 典生 (新潟大学第一外科)

当科では癒着性イレウスの保存的治療に、イレウス管を用いた腸管の減圧を第一選択としている。その有用性については、第224回新潟外科集談会にて報告した。

その後イレウス管による減圧で改善が認められない症例には、狭窄の程度、部位診断のため、イレウス管造影を行い、手術適応決定の参考にしていく。

今回は、最近のイレウス管造影5例につき、造影所見、手術所見を中心に報告する。

それら症例の経験から、イレウス管造影に以下の有用性が認められた。

1. イレウス管造影により、閉塞部位・閉塞程度の診断が可能である。
2. 手術時不必要な癒着剝離を行わなくとも、閉塞部位に到達することができる。
3. 十分な減圧が行われているため、腸切除、吻合も容易となる。

8) 腸結核癭痕粘膜に発生し、粘液癌を伴った上行結腸腺扁平上皮癌の1例

神田 達夫・白井 良夫
 鈴木 力・畠山 勝義 (新潟大学第一外科)
 武藤 輝一
 山口 正康・味岡 洋一 (同 第一病理)
 本間 慶一 (同 第二病理)

我々は、腸結核癭痕粘膜に発生した、粘液癌と腺扁平上皮癌の、同時性多発大腸癌の一例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

症例は81才の女性、右下腹部痛を主訴に受診。注腸造影にて、2型上行結腸癌と診断され、右結腸半切除術が施行された。病理所見では上行結腸および盲腸に、それぞれ5.0×4.5cm、2.5×2.0cmの2型の進行癌が認められた。組織学的に前者は腺扁平上皮癌の像を示し、後者は粘液癌であった。癌周囲に潰瘍癭痕帯が認められ、粘膜萎縮帯、粘膜下層の線維筋症を伴っており、腸結核疑診例と診断された。後腹膜に小結節が散在性に認められ組織学的に扁平上皮成分を主体とする癌転移であった。

大腸の腺扁平上皮癌は稀であり、その多発癌にいたっては、国内外併せて、過去4例の報告があるのみである。一方、腸結核に癌が合併することも比較的稀とされており、腺扁平上皮癌の合併は本例が第2例目である。